

江差線10駅 最後の夏

9 上ノ国

■メモ 上ノ国町大留、1936年（昭和11年）11月10日の江差線全線開通と同時に開業。旧駅舎の老朽化に伴い、92年に現在の駅舎に建て替えられた。駅舎内には観光案内所もあり、町内の特産物や名所をパンフレットなどで紹介している。木古内駅から36・0キロ。



上ノ国駅舎は和風住宅の
ような外観だ。中をのぞくと、上ノ国町商工会の事務所が入居し、商工会に隣接して駅待合室がある。2階建ての現駅舎は1992年の新築。前は木道の駅舎が立っていたが、町商工会が商工会館を建て替えて一部を駅待合室とした。
駅員もおらず切符は販売していない。それでも「駅事務所と勘違いし、切符を売ってほしい」と訪ねてく



鉱石の積み出し拠点



上ノ国町商工会が入居している上ノ国駅舎。左手前が待合室の出入り口

る旅行客もたまにいる」。通学。63年から6年間は駅員として勤務した。当時、以下にまで減った。同校1は、そう言って笑った。午前6時50分発の江差行き3両編成は高校生で常に満員。ホームにも人があふれマンガンの積み出し拠点とていた。「列車乗降口付近に高校生がかたまると乗客がなかなか乗れず、中に詰めてくださいとお願いする。乗客も多く、61年度の乗降客数が約31万5千人に達した。現在、駅前にはスーパーなどが立地する商業地だが、上ノ国町議で元J北海列車に乗る買い物客はほとんど社員（佐藤正平さん）の通学に利用するのは、上ノ国から江差高にの通学に利用するのは数人。1日の駅利用者には10人。それがこの夏、江差線木古内―江差間の来春廃止決定を受けて鉄道ファンが押し寄せたため、異例のラッシュを経験。「帰りの列車が満員で座れず、びびりながら立地する商業地だが、上ノ国町議で元J北海列車に乗る買い物客はほとんど社員（佐藤正平さん）の通学に利用するのは、上ノ国から江差高にの通学に利用するのは数人。